

魔法の Wallet プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：森下 竹志 所属：仙台市立鶴谷特別支援学校 記録日：2020年2月10日

キーワード：思いを伝える，安心感，将来の生活，自信の回復

【対象児の情報】

・学年

中学部2学年 男子生徒

居住地の小学校を卒業後，本校の中学部へ進学。

・障害名

知的障害，ダウン症候群

(ビネー知能検査V MA4才1か月 IQ30 R元年実施)

・障害と困難の内容

- ①人前や1対1ではない状況で，話すことを極端に苦手としている。
- ②小学校に通っていた頃，同級生に発音をからかわれた。以降，家庭以外の場所で発信することが減った。
⇒発音や行動に自信がなく，消極的な姿勢を見せることが多い。人の視線が集まることに不安を感じる。
- ③苦手と感じていることに挑戦するように促すと，寝そべって動かなくなるなど，強い拒否行動が見られる。



上：苦手な事を拒否する姿

左：人の視線により不安を感じる姿

【活動目的】

・当初のねらい（学習目標）

- I 機器やアプリの基本操作法と使用上のルールを習得し，有効に活用できるようになる。
- II 1対1ではない状況において，自分から支援者に呼び掛け，気持ちや用件，進捗状況を伝えられるようになる。
- III 朝の会など，学級単位で学習を進める時間において，司会を担当したり，自分の気持ちを簡単に発表したりできるようになる。
- IV 学部全体の前で，自分の気持ちなどを発表できるようになる。
- V 1対1の状況ではない中で，支援者と会話を楽しめるようになる。

I～Vの目標達成に迫る中で，成功体験と称賛される経験を多く積ませ，1対1の状況ではない中で，人に発信することに対する自信を深めさせる。その上で，Vの段階に取り組みせ，1対1の状況でない中でも，コミュニケーションを楽しめるようにしたい。

・活動による方向性と計画変更状況（7月末に追加）

I～Vの学習目標をおおよそ達成，または達成する見込みが高くなったため（詳細は，活動の具体的内容に記載。），以下の活動と目標を加えることとした。

- VI 保健室や事務室などに物を届けたり，受け取りに入ったりする際に話ができるようになる。
- VII 同じ学部の教師や生徒に話し掛けたり，聞いたりすることができる。
- VIII 自分の声で様々な人とコミュニケーションをとれるようになる。

・実施期間

2019年4月～2020年2月（継続中）※昨年度の本校採択者から機器引き継ぎのため，4月より実施。

・実施者（対象生徒との関係）

森下 竹志

・実施者と対象生徒の関係

学級担任

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

〈プロフィール〉

- ・小学校は、居住地の学校に通い、主に肢体不自由の児童と一緒に学習した。
- ・発音がやや不明瞭であり、学校では非常に小さな声で話す。
- ・自分が苦手だと感じていることや初めてのことに対して、座り込みや寝そべるなどといった行動で強い拒否を示す。
- ・年代に関わらず、女性よりも男性の方が話しやすいと感じている。
- ・仲良くなりたいと考えている人は、年代に関わらず女性が大半である。



安心して話せる場

〈機器活用に関して〉

- ・機器への関心が高く、採択者が使っていると、遠くにいても近寄ってきて質問する。
- ・家族や友達と一緒に使った経験はあるが、一人で使ったことはなかった。
- ・iPadはタッチして操作するということを理解しており、楽しい物という印象を持っていた。

〈学習面〉

- ・清音のひらがなを読むことができる。促音や濁音、半濁音は不完全である。自分の名前など、生活や学習の中でよく使う単語を書くことができる。
- ・昨年度から片仮名の読み書きの学習に取り組んでいる。30音程度は読めるようになった。また、「カン」など短く、清音のみで構成されている単語を書くことができる。
- ・文字を読み上げる際には、「あ・さ・の・か・い。」などと、一文字ずつ区切って発音する。普段会話する際には、このような話し方をすることはないため、文字は単語レベルではなく、一文字ずつ認識していると考えられる。

〈コミュニケーション〉

- ・音声言語でのコミュニケーションが可能で、大人と会話することを好む。しかし、他の生徒や信頼関係が構築できていない支援者が同室にいると、誰に対しても上手く呼び掛けたり話し掛けたりすることができなくなる。そういった場合、1対1の状況下では、スムーズに答えられる問い掛けにも全く答えられなくなり、下や横を向いて固まることが多くなる。その際には、強い拒否行動を示すこともある。また、支援者に伝えたいことがある際には、腕を強く引く、相手の目の前に顔を近づける、いたづらをして関心を引こうとする、などの行動を音声言語での発信の代わりに取る。他者からの視線を感じない区切られた空間で、支援者と1対1の状況であれば、「ねえねえ。」と話し掛けたり、好きな仮面ライダーの話や、週末の予定、家族の話などについて、自分から話したりすることができる。
- ・中学部内の生活に関することは、支援者が話し掛ける内容についてほとんど理解し、短く返答することができる。例：採択者「運動会で一番どきどきする競技は？」対象生徒「徒競走。」
- ・人前で話すことを極端に苦手としており、朝の会などで司会を担当する際には、視線を避けるように背を向けて立ち、固まることが多い。人前でうまく話せることは、カッコいいことだと感じており、自分もできるようになりたいと話している。

・活動の具体的内容

〈使用機器等〉

- ・iPad mini
- ・アプリ 「DropTalk」
- ・Bluetooth スピーカー

メッシュ地の肩掛け袋を準備し、携帯できるようにした。

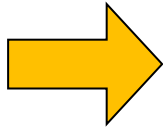


DropTalk

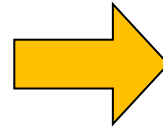


使用機器

〈現在〉



〈活動〉



〈将来〉



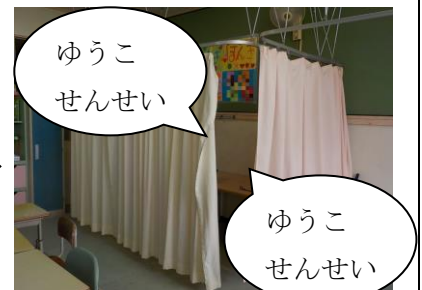
自信を持ってコミュニケーションを取れるようになるために、iPadを活用し成功体験を積み重ねる。成功体験を積み重ねる中で自信を深め、様々な手段で自由にコミュニケーションを楽しめるようになるための礎を築く。本報告書では、活動を前期、中期、後期の3期に分けて報告する。()内は、活動目的の学習目標との関連。

〈前期 4月～7月〉

①身近な人に伝える(Ⅱ)

「新担任と話したい！」

今年度から担任となった女性教諭に話し掛けたいと考えていることが分かった。採択者を女性教諭に見立て、「ゆうこせんせい、おはようございます。」と2マスを順番に押して話し掛ける練習を繰り返した後、実践に臨んだ。

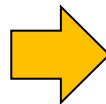


何度も挑戦した結果、数日後に話し掛けることに成功した。呼び掛けに応じて、女性教諭が振り返ると恥ずかしかがって背を向けて固まった。女性教諭から何を話し掛けられても動くことはなかった。後日、安心できる場であるカーテンの中から「ゆうこせんせい」と連打する姿が見られた。「Droptalk」で話すと、相手に伝わると感じたようだ。

②対象を広げる(Ⅱ)

「保健室の先生と話したい！」

学級に出入りする身近な教員に話し掛けられるようになった頃、「ぼく、ほけんしつで、おはなし、したいなあ。」と伝えてきた。養護教諭とは、これまで一度も話をしたことがなかった。コミュニケーションに対する意識の変化を感じた。また、心の内にある思いを学校で他者に伝えられたことも大きな変化であった。

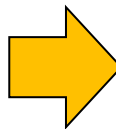


以前から話したいと秘かに思っていた養護教諭と上手く話すことができた。感想インタビューでの発言からコミュニケーションの楽しさや伝わる喜びを味わったことが伺える。教室への帰り道に「つぎ、あのひとと(も)、おはなし、したいなあ。」と、コミュニケーションに対する前向きな発言が聞かれた。

③集団の前で話す（Ⅲ・Ⅳ）

「みんなに見本を見せよう」

情報モラルの授業で機器操作の見本を依頼すると、「できるよ。」と力強い返答があった。本番の前は、座り込み教室から出てこなくなった。何度か「一緒にやろう。」と促すと、一人で立ち上がり授業に臨んだ。



学級や学年など、小集団の前で話す経験を多く積んだ後の実践であったため、対象生徒はある程度人前で話すことへの自信を深めていたと思われる。しかし、この実践は参加者が50人以上と非常に多く、指が震えるなど、ひどく緊張した姿が見られた。見本を見せることは難しいかと思われたが、自分の好きな物について無事に話すことができた。他の生徒の方を向くことは、難しかった。この実践の後から、音声言語で担任の女性教諭に話し掛ける姿が見られるようになった。

〈中期 8月～10月〉

①自分の気持ちを伝える（Ⅴ）

「あの先生とも話したい！」

他学年の教員とも話したいと考えていたことが分かった。特に話したいと考えていたのは、作業で同じ班の教員であった。授業の際に、手伝ってもらったことのお礼を言いたいという趣旨の話をしていた。実践当日の朝に伝えてきたため、練習をせずに話し掛けたが上手く伝えることができた。自分が考えていたよりも上手く伝えられたようで非常に満足そうだった。中期の実践③に取り組むきっかけとなったやりとりである。



②発声練習で自信を深める（Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ）

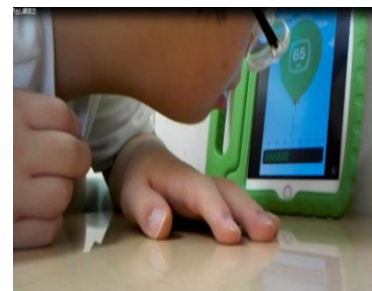
「大きな声を出してみよう」

「DropTalk」に肉声を録音する際、声量がなく上手くできないことが多くあった。普段、非常に小さな声で話すため、大きな声を出す練習が必要だと考え、アプリ「NoiseLevel」を活用し、発声練習に取り組んだ。毎朝5分程度、継続的に取り組んだ。初めは「一番大きな声出して。」と言って40dB程度であったが、一か月後には60dB以上出せるようになった。100dBを超えると、画面上の風船が割れる。採択者が見本を見せると、「どうしたら、でっかいこえ、でるの？」と質問してきた。その後は、100dB超えを目指している。

※dBはアプリ上の表示であり、周囲の騒音も拾っている。



「NoiseLevel」



③カメラの使い方を覚える (VII)

「先生や友達の写真を撮ろう」

「いろいろな人に話し掛けに行こう。」と誘うと、何か口実が必要だという趣旨の返答があった。採択者と対象生徒とでアプリを複数検討した結果、Apple 社純正のカメラアプリを使うことになった。まずは、これまでの実践を通じて、音声言語でも話せるようになった人を相手にして、練習した。すでに話せる人が相手であったため、スムーズに取り組むことができた。写真を撮った後、相手と一緒に見て、盛り上がるのがうれしいようであった。その際には、音声言語でやり取りを楽しむ姿が見られた。



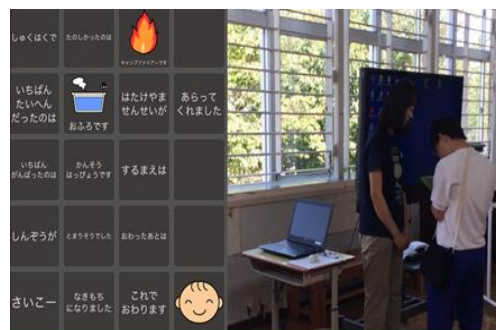
「カメラ」



④集団の前で話す (III・IV)

「宿泊学習の感想を発表しよう」

学級の代表として、宿泊学習の感想発表を中学部全体の前ですることになった。対象生徒は、自信がないという趣旨の発言をしていたがキャンパスを作成する事には非常に前向きであった。話したい内容や感想を次々と口にしたため、採択者がまとめた。発表練習の際には、「…やっぱり、やめた。」など、後ろ向きな発言が多く聞かれた。本番では、緊張のあまり一行飛ばして話したが、自分の声を録音した部分で笑いを取ることができた。



後期 11～1月

①いろいろな人に話し掛ける (VI・VII・VIII)

「カメラを武器に」

中期③の実践を通して、カメラの使い方や話し掛け方を覚えた。そこで、話をしたことがない他学部の教員などに話し掛けにいった。相手は職員写真を見て、対象生徒が選んだ。物怖じすることなく、多くの教員に話し掛けることができた。普段の生活の中では、なかなか話す機会がない校長とも写真を撮ることができた。この時に写真を撮った教員とは、その後、音声言語で挨拶する姿が見られる。一部の教員には自分から駆け寄り「おはよう。」と挨拶するようになった。



②集団の前で話す (III・IV)

「新年の目標を発表する」

学級の代表として、中学部全体の前で新年の目標を発表する担当となった。すべてのマスを本人の肉声で録音した。ほとんどのマスを一回の録音で成功することができた。本番は、非常に緊張し、採択者に後ろに立って手を持ってほしいと頼んできた。発表を始めると振りほどこうとする動きを見せたため、後ろから軽く支えるだけにした。様子を伺うと、支える必要もなさそうであったため、最終的に後ろに座るだけにした。最後まで無事に発表することができた。



・対象生徒の事後の変化

- ① 1対1ではない状況下であっても、採択者や他の教師と音声言語で話せるようになった。
- ② 自分から話し掛ける場面・人が増えた。
- ③ 音声言語で話す際に、声が大きくなった。
- ④ 「DropTalk」を活用すれば、学級や学年などの小集団の前で、物怖じすることなく話すことができるようになった。
- ⑤ 「DropTalk」を活用すれば、普段関わりの少ない人に要件や気持ちを伝えられるようになった。
- ⑥ 「DropTalk」を活用すれば、大きな集団の前で話したり発表したりすることができるようになった。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

対象生徒は、本実践を通じて話すことに対する自信を深め、伝わる喜びを感じたと考えられる。

・エビデンス

実践前は、学校内で明確なやり取りがあったのは、同じ学年の教員など5人程度であった。その中でも、音声言語で話すのは、採択者を含めて2人であった。他の教員や友達には、挨拶をされても下を向き返答しない程であった。2月現在、同じ学部の教員から挨拶を受けると、ほとんどの場合で「おはよう。」と返すことができる。一部の教員には、自分から駆け寄り挨拶したり、その日楽しみにしていることを伝えたりする姿が見られる。写真は、地域交流で初めて会う人に、音声言語で身振りを交えながら自分の経験を伝える場面である。

伝えたい、伝わるとうれしいと考えていることを感じさせる場面であった。実践前は、教員との関わりを求めることが多く友達と話すことはほとんどなかった。実践後半には、友達に話し掛けようとする姿が何度も見られた。コミュニケーションに対して、自信を深められたと感じる。



・その他エピソード

「DropTalk」を最大限活用するためには、もっと文字を正確に覚える必要があると感じている。左の写真は、休み時間に学級の教師や友達の名前書き写して覚えようとする姿。また、話すことだけでなく、様々な活動に対して積極的になる姿が見られる。右の写真は、音楽の時間に自分から楽隊に立候補して集団の前に立った姿。

